



はなやま 28号 もくじ

①新病棟建設について

②新任医師紹介

新病棟建設について

○病院の隣で進んでいる工事をご覧になった方から、「一体、何ができるのですか?」とご質問をいただくことがあるようです。そこで、今回の『はなやま』の紙面をお借りして、現在進行中のプロジェクトについてご説明させていただきます。

今建てておりますのは、国道354号側から見て手前に位置する「多目的ホール」と、その奥に見えます4階建ての「新病棟」です。現病院が完成してからまだ数年しか経っていないこの時期に、なぜさらなる拡張をするのか。まずはその歩みから振り返っていきます。

1. 移転から現在までの歩みと、直面した課題

羽附町の旧病院に外来部門（現クリニック）を残し、病棟と手術室を現在の場所に新築・移転したのは2019年（令和元年）3月のことでした。当院は開院以来、「手術療法」を診療の柱としてまいりました。手術件数は年々増加の一途をたどり、2013年以降は毎年3,000件を超える実績を重ねています。旧病院の3室の手術室では物理的に対応が限界に達し、さらに建物や設備の老朽化も始まっていたことが移転を決断する契機となりました。幸いなことに、移転を決めてから多くの方々にご尽力・ご

協力をいただき、現在の広い土地に新病院を建てることができました。現病院を建てるに当たっては、2011年の東日本大震災の教訓から、「災害時であっても地域医療のために病院機能を維持しなくてはならない」という強い使命感を抱きました。そのため、現病院には当時の最先端の免震機能と自家発電設備、そして最新の医療機器を備えました。手術室を5室に増やしたことで、手術待ちの待機期間は大幅に短縮され、救急患者さんの受け入れも旧病院時代とは比較にならないほどスムーズになりました。こうした救急医療の提供体制が評価され、2022年には「社会医療法人」としての認定をいただくに至りました。

しかし、医療の質が高まる一方で、新たな課題が浮き彫りとなりました。建物は新しくなりましたが、認可されている病床数自体が増えたわけではありません。手術件数が伸びるにつれて入院を必要とする患者さんが増え、次第に「手術はできるが、入院するベッドがない」というジレンマに陥ることが多くなりました。移転から3年が経過した頃からは、満床を理由に救急車の受け入れをお断りせざるを得ない事態も生じるようになりました。本来であれば病床を増やすべきですが、国による急性期

病床の削減政策の下では、単純な「増床」は極めて困難です。しかし、現場で診療にあたっている私たちの肌感覚としては、この館林周辺地域において整形外科の高度な治療を受けられる病床は明らかに不足しています。宇澤理事長が県や医師会、さらには厚労省にまで出向き、地域の窮状を粘り強く訴え続けてきた結果、隣接する太田市で閉院する病院の病床を継承(M&A)するという形で、ようやく今回の増床・新棟建設への道が開かれたのです。

2. 新病棟：全室個室と免震技術

新棟は4階建ての建物となっており、1・2階には給食部門や管理部門、医局などのバックヤードを集約します。そして3・4階が新病棟となります。今回増床する48床は、すべて「個室」として設計しました。

10年前に現病院を計画した際、プライバシーの保護と感染症対策の観点から、当時としては全国的に珍しかった「全室個室」案を採用しました。まさか竣工から1年も経たずに新型コロナのパンデミックが起きるとは予想していませんでしたが、全室を個室化してあったおかげで、厳しい時期も院内感染を起こさずに救急患者の受け入れを継続することができました。この「個室の重要性」を再確認したことが、今回も迷わず全室個室を選んだ最大の理由です。

また、建物自体の安全性にもこだわっています。現病院と同様、震度7の揺れでも医療機能を維持できる「免震構造」を採用しました。免震装置は地震のエネルギーを吸収し、建物をゆっくりと揺らすことで、内部の医療機器の故障や家具の転倒を防ぎます(図1)。

ここで一つ、専門家から教えていただいた技術的に興味深いポイントをご紹介します。現病院と新棟は各階で「渡り廊下」で繋がりますが、地震が起きた時に二つの建物はシンクロすることなくバラバラに揺れます。建物ごとに重さや形が違ふことや、地震波の伝わる周期が微妙に異なるからです。もし単純に繋ぎ合わせているだけだと、地震の際に渡り廊下には極めて大きな力が加わり損壊の恐れがあります。

この課題を克服するのが、『免震用エキスパンション・ジョイント』と呼ばれる特殊構造です。建物と渡り廊下の床プレートが接合部において引き出しのように相互にスライドし、地震発生時には渡り廊下の床面が柔軟に

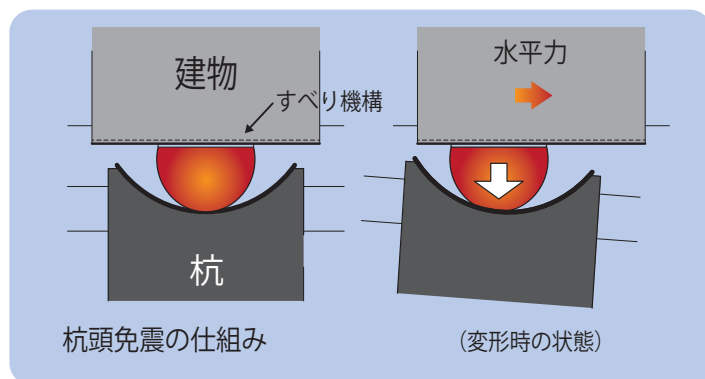


図1：病院杭頭面神の仕組み

伸縮します。また、天井や壁の接合部には蛇腹状の緩衝構造を採用することで衝撃を吸収し、建物のみならず渡り廊下自体の損壊をも未然に防ぎます。この精巧かつ安全性の高い多層階免震廊下は、地震大国である我が国が培ってきた世界最高峰の建築技術です。そして、ミリ単位の精度が要求される難度の高い構造体を作り出しているのは、現場で仕事をする技術者たちの卓越した職人芸であることは言うまでもありません。ただし、地震発生時にこのジョイント部分に立っていると、足元の床の隙間が開いて足を挟まれたり、床プレートが跳ね上がってくる可能性があります。もし渡り廊下を通行中に強い揺れを感じたら、すぐにジョイント部分を離れ、渡り廊下の中央付近か、建物の中へ移動してください(図2)。

3. 多目的ホール：地域と病院をつなぐ「未来の広場」

続いて、国道側の「多目的ホール」についてご紹介します。現在、当院の職員数は400名を超えています。しかし、既存の建物内には全職員が一堂に会するスペースがなく、全体集会や研修の実施に苦労しておりました。そこで、新しい病棟を建てるのにあわせて、広い講堂を作ることになりました。当初は新棟の5階を講堂に割り当てて設計を進めていましたが、宇澤理事長の「せっかく作るのなら、職員だけでなく地域の皆さんにも開放して、交流の場として活用していただきたい」という強い想いにより、独立したホールとして建設することになりました。

このホールは、椅子席ですと500名、机を配置しても350名程度を収容できる広さを確保しています。当院主催の市民公開講座や医学研究会はもちろん、地域の皆様の集会や発表会、さらにはバンケット会場としても活用いただけます。また、大規模災害時には、被災された方々

の一時避難場所としての役割も担う想定です。音響設計については、講演会向きの「反響の少ない（デッドな）」空間を考えていましたが、「時には美しい音楽に浸り、心癒やされる時間も大切にしたい」という意見を取り入れ、最終的には講演会から演奏会まで多目的に対応できる、ほどよい残響を持つ空間に落ち着きました。

ホールの入り口は駐車場側にあり、エントランスから入るとホワイエ（ロビー）、そしてホールへと続きます。南側と東側にはホワイエから続いて、ぐるりとホールを囲むように、ラウンジスペースが回廊状に配置されています。東側のラウンジは全面ガラス張りとなっており、その先に広がる「未来の広場（芝生広場）」を一望できます。天気の良い日にガラス扉を開け放てば、ラウンジと屋外テラスが一体となった気持ちの良い空間となるでしょう。毎年恒例となっている「夏のウォーターフェスティバル」や「秋の花火大会」を開催するときには、職員や家族がここに集い、楽しいひとときを過ごすことができるはずです。集まった子どもたちの笑顔を、今から楽しみにしています。

4. 現病院の改修工事

新棟とホールの完成後には、引き続き既存病院棟の改修工事という、もう一つの重要なステップが控えています。今回の増床によって入院患者さんが増えれば、当然、必要となる手術数もさらに増加します。そのため、既存の手術フロアを拡張し、新たに2室の手術室を増設します。これにより、当院の手術室は合計7室となり、より多くの患者さんに、より迅速に高度な外科治療を提供できるようになります。

実は、現病院の計画を進めていた時に、将来の拡張を想



図3：2026/07/13 時点での新病棟・ホール

定して設計を行っていました。手術室の増設を見越した動線やスペースをあらかじめ確保していたため、今回の改修工事は、何とか病院の機能を止めることなく進めることが可能となっています。

とはいえ、工事中は騒音や振動をはじめ館内の移動などで何かとご不便をお掛けすることになってしまいます。さらに現在は、世界的な情勢不安（イラン情勢等）の影響により、建築資材の調達に一部遅れが生じております。当初予定していたスケジュールから工期が多少延びる可能性もありますが、安全を第一に最高の医療環境を整えてまいる所存です。工事期間中、入院されている患者様や近隣にお住まいの皆様には大変なご不便とご迷惑をおかけいたしますが、地域の医療体制を次世代へと繋ぐための重要なプロジェクトであることをご理解いただき、温かく見守っていただければ幸いです。

これからも慶友整形外科病院は地域に根ざし、皆様の健康を支え続けられるよう、職員一同、尽力してまいります。

病院長 藤田尚

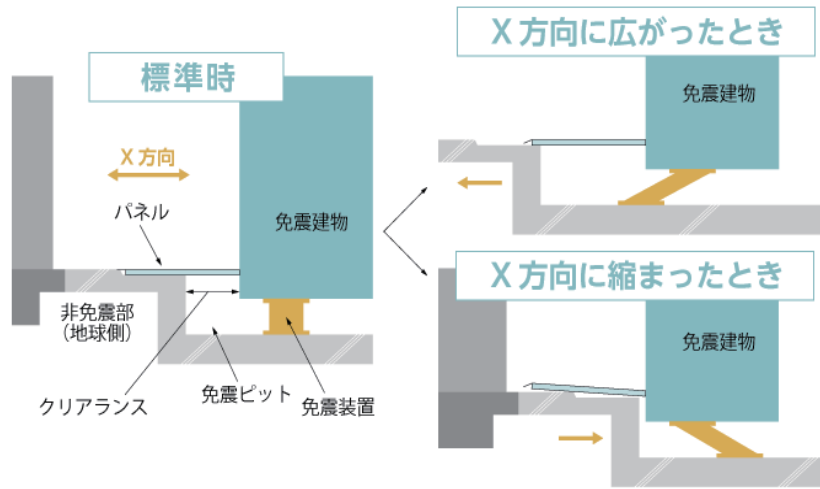


図2：免震用エキスパンション・ジョイントの構造（ナカ工業 HP 参照：
https://www.naka-kogyo.co.jp/about/products_07.html

新任医師紹介

● 篠崎 義雄（しのざき よしお）



平成 12 年旭川医科大学卒，慶応義塾大学整形外科入局，伊勢原協同病院，けいゆう病院，魚沼病院（現：小千谷総合病院），慶応義塾大学病院，日野市立病院，静岡赤十字病院 整形外科副部長 脊椎センター長，しずおか整形外科病院，太田記念病院を経て、令和 8 年 4 月当病院勤務。日本専門医機構認定整形外科専門医，日本整形外科学会脊椎脊髄病医，日本脊椎脊髄病学会指導医，医学博士

4 月より太田市にある太田記念病院から赴任いたしました。太田に来る前は、14 年間、静岡にある静岡赤十字病院脊椎センターで勤務しておりました。出身は宇都宮であり、ご縁があって地元の近くに戻って来られて感無量であります。北関東の方は人柄が良く、毎日楽しく診療をさせていただいております。脊椎を専門としておりますので、首や腰の痛み、手足の痛みやしびれなど、脊椎疾患でお困りのことがございましたら、お気軽にご相談ください。

● 加藤 修三（かとう しゅうぞう）



平成 28 年慶応義塾大学卒，済生会横浜市東部病院，慶応義塾大学病院，さいたま市立病院，川崎市立川崎病院，国際医療福祉大学三田病院，けいゆう病院，荻窪病院，慶応義塾大学病院，太田記念病院を経て、令和 8 年 4 月当病院勤務。日本専門医機構認定整形外科専門医，医学博士

令和 8 年 4 月より当院に赴任いたしました。これまで大学病院をはじめ、東京近郊の医療機関において、整形外科医・脊椎外科医として診療に従事してまいりました。昨年度、家族とともに群馬県へ移住し、現在は両毛地域に生活の拠点を移しております。

当院では、腰椎疾患や頸椎疾患をはじめとした脊椎疾患の診療を担当いたします。腰痛、頸部痛、手足のしびれ、歩行障害など、気になる症状がございましたら、お気軽にご相談ください。地域の皆様、当院を受診される患者様のお力になれるよう、丁寧な診療に努めてまいります。どうぞよろしくお願い申し上げます。

● 石川 裕太郎（いしかわ ゆうたろう）



令和 2 年琉球大学卒，埼玉石心会病院，埼玉県立がんセンター，東京医科歯科大学病院（現：東京科学大学病院），草加市立病院，さいたま赤十字病院，済生会川口総合病院を経て、令和 8 年 4 月当病院勤務。日本専門医機構認定整形外科専門医

令和 8 年 4 月より当院に赴任しました石川と申します。これまでは四肢外傷をはじめ、上肢下肢、脊椎疾患も外来から手術まで幅広く研修してまいりました。元々スポーツ障害の診療に興味があり、今回大学の先輩である当院の高橋啓先生とのご縁のおかげで、慶友整形外科病院の一員となりました。今後は四肢外傷や上肢スポーツ障害、胸郭出口症候群を中心に担当させていただきます。両毛地域をはじめ全国からいらっしゃる患者様、日常生活での痛みやしびれ、スポーツ障害などで困っている方々の治療をサポートし、元気に笑顔で過ごせる日常を取り戻すお手伝いができるように一生懸命頑張ります。どうぞ宜しくお願いいたします。

Information

外来

慶友整形外科クリニック

0276-72-6000

〒374-0011
群馬県館林市
羽附町 1741

入院・手術

慶友整形外科病院

0276-49-9000

〒374-0013
群馬県館林市
赤生田町 2267

社会医療法人
慶友会

<http://www.ku-kai.or.jp>



外来

宇沢整形外科

0276-74-8761

〒374-0016
群馬県館林市
松原 1-10-30

健診・ドック

慶友健診センター

0276-75-7000

〒374-0016
群馬県館林市
松原 1-10-30